

今回は、ゆっくりした自由気ままなイギリスの旅を考えました。JTBには、ホテルと航空機だけを頼み、あとは、全くの自由裁量。どうしても行きたかったエジンバラに最初に一日滞在し、翌日ロンドンへ移動、あくる日から6日間、連続して滞在しました。6日間のイベントとして、ロイヤルフェスティバルホールでのコンサート、カンタベリーへの日帰り列車旅、ポートベリー骨董市冷やかし、コッツウォルズへの日帰りバスツアーを入れました。

6月4日、13時10分、ロンドン・ヒースロー空港に到着。広大な空港内を移動するバスがなかなか来ないので、いらいらして機内で待っている日本人女性がいました。聞くと、エジンバラ行きの乗り換えに間に合うか心配している由。入国審査、厳しい手荷物検査をやっと通過し、エジンバラ行きに無事、乗り込みました。私と同年配に見えるこの女性は夫婦で、レンタカーを借り、イギリス国内を回ると言います。羨ましいです。私には真似ができません。

エジンバラのホテルはメインの観光通りであるロイヤルロードのそばでした。夕食は手っ取り早く、ロイヤルロード沿いのパブに入りました。パブでは、カウンターで注文するものと思いましたが、食事をするとと言うと席に注文を取りに来てくれました。ビールとスモークサーモン、ハギスを注文しました。ハギスはスコットランド料理で、羊の内臓を肉団子にして揚げたものです。味はまあまあでした。

翌日、エジンバラは快晴。ネット予約したエジンバラ城入場券を、実際の入場券に交換して、城内に登ると、そこは広い高台で、廃墟になった建物が点在し、砲台も多数、街に向かって据えられていました。いくつかの建物が、記念館になっていて、エジンバラの歴史を展示していました。観光客が列をなして登って来て、高台からエジンバラの古い町並みを見下ろしています。遠く、北海も見え、巨大な鉄道橋のフォース橋も一部が見えました。すばらしい好天と広い廃墟の群れは、強く印象に残りました。エジンバラ城を後に、ロイヤルロードの下り坂を下り、交差点を左折して更に下るとスコットランド国立美術館があります。この辺りの地形は、谷底に鉄道が走っていて、周囲を緑で囲んで公園のようになっていて、線路がトンネルに入ったその上に美術館が建っています。美術館に入ると、退屈な宗教画の群の中に、ポツンとベラスケスの「卵を料理する老女」を見つけました。日本のTV番組で紹介していたものです。これをきっかけに元気が出て、知っている画家を探すとフェルメール1枚、ゴッホ2枚、セザンヌ、ドガ等を見つけました。この美術館は、背もたれのあるゆったりしたソファが部屋の真ん中にあり、休み休み、ゆっくり絵を鑑賞できました。

6月6日のロンドンへの移動で懸案は、ヒースロー空港の地下鉄の駅で、オイスターカードを入手すること。ネットで勉強していたので、クレジットカードを使って無事、入手できました。オイスターカードは事前にチャージしておいて、地下鉄に乗る度に運賃が差し引かれるもの。毎回、切符を買うのに比べ、約半額になります。ロンドンのホテルは地下鉄グロスターロード駅のすぐそばで、ヒースロー空港から、ピカデリーラインで直行できました。夕食は、再び、ホテル近くのパブ。ここではビールも料理もカウンターで注文して代金を払う必要がありました。料理は有

名なフィッシュアンドチップス。フィッシュはタラ、一人前で、二人に丁度良い量でした。このパブは以後、2回利用し、ビーフパイとサンデーローストの料理を味わいました。

6月7日、ロンドンでの初日。先ずウォレスコレクションに行くことにしました。昔の貴族の館が美術館になっていて、館の雰囲気と美術、工芸品を鑑賞できる所。地下鉄ピカデリーラインのグリーンパーク駅で降り、ジュビリーラインに乗り換える必要があります。このときジュビリーラインのホームでは、両側の線路の行先の駅名を全部示した表示板があり、ホームのどちら側に乗れば良いのかすぐに分ります。以前に行ったパリの地下鉄では、この表示板がなく、ライン名と終着駅しか示していないので、自分が降りる駅名の外に、終着駅名も覚えてホームを探す必要がありました。この点、ロンドンの方が、しょっちゅう地下鉄を乗り換えて観光する旅行者には便利です。さて、ウォレスコレクションは、端正なレンガ造りの3階建て。狩猟に関わる絵で飾られた豪華な部屋、多数の甲冑を集めた部屋、カナレットのベネチアの絵、ベラスケス、ルーベンス、初めて知ったフラゴナールの「ブランコ」など多数の絵が飾られ、中庭はガラス天井のカフェになっていました。

次の行先は、テートモダン。地下鉄セントポール駅で降り、セントポール大聖堂の横を回り、歩道専用のミレニアムブリッジでテムズ河を渡り、テートモダンに直行。ここでは、ピカソ、マチスが目標でしたが、特別展のため、通常は無料のところ、有料になっていたため、割愛しました。後で、後悔しました。ここでゆっくり休憩して、テムズ河岸を30分歩き、ロイヤルフェスティバルホールへ移動しました。この日にベートーベンの交響曲「運命」が演奏されることをホームページで知り、日本で、ネットでチケットを購入していました。開演前、各階の待合室のテラスでは、ビール片手に談笑する人々が群れ、音楽が日常生活に溶け込んでいる様子でした。演奏は最後の盛り上がりがすばらしかったです。

6月8日、朝、国鉄ビクトリア駅からカンタベリーに向いました。列車運賃は、往復二人で68.2ポンド。片道1時間半の旅。鈍行の旅も良いものです。各駅で、黒人女性の車掌がホームに降り、笛を吹いてドアを閉める、昔ながらの風景です。カンタベリーに着いて、先ずクリームティーの昼食。スコーンにクリームとジャムを付けたのが美味しかったです。カンタベリー大聖堂は、イギリス国教会の総本山、巨大でステンドグラスがきれいでした。ヨーロッパの旅では、教会の建物には食傷しているので感動は少ないです。それより私の目当ては、大聖堂から歩いて15分程の所に残っている聖アウグスティヌスの修道院跡。1400年前、ローマから布教に来た聖アウグスティヌスに与えられた修道院の壁の一部や基礎が点々と廃墟になって残っていました。天気は良く、観光客は誰もおらず、広い草原の中の廃墟をぼんやり眺めると心が洗われるようでした。勿論、有料で、二人で13.8ポンド。

6月9日。ポートベローの骨董市はロンドンで最も賑やかと言われ、土曜日はアンティークで賑わうとガイドブックに書かれてあったので、期待して8時前には、現場に着きました。準備中の店が多かったですが、通りを往復している内に人も店も増えました。場所は緩い坂道で、両側に店が続き、通りは車が2列に駐車して、その間を縫うように臨時の店が開いていました。目当て

は、ブルーウィローの食器の皿でしたが、その店はほとんどありません。いったいに、この市は駐車した車の列で、人がそぞろ歩くスペースが狭く、銀細工や布地の店がやたらに多い。3年前に行ったパリのバンプの蚤の市と比較して、あちらは木陰の下で、臨時の小店が並び、駐車した車もなく、のんびりと商品を冷やかして歩くことができたのに、ここは期待に反して、距離は長いものの目指す品物はほとんどない状況で失望に終わりました。

午後は、ナショナルギャラリーでフェルメール、ゴッホ、ゴーギャン、ピカソ、マチス等、おなじみの絵を見ました。

6月10日。自然史博物館は、ホテルから歩いて行ける距離にあり、建物は宮殿のように広く巨大でした。入ると恐竜の骨が天井から吊られてお出迎え。日曜日で、子供連れが、10時の開館と同時に、列を作って入っていました。マンモスの化石もありました。どの恐竜も重い体重を支えるため、足の骨が特に巨大でした。

次に入ったのは、隣接するビクトリア・アルバート博物館。ここは何でもありの博物館で、目的なく入ったので、広い館内を歩き回ってくたびれただけです。気分一新に、午後は、リージェントパークに行き、クイーンメアリーズ・ローズガーデンを見物。ツアーであれば、6月に必ず訪れるコースになっているバラ園で、着くと、園内の道に沿って、延々と何十種のバラが咲いていました。時期が少し遅く、散っているのもありました。バラの木の根元は、肥料がどっさり与えられていました。

コッツウォルズ日帰りバスツアーは、現地の「みゅう」という会社の主催です。日本で、ネットで事前に申し込みました。6月11日朝、8時に国鉄ビクトリア駅の待合場所に集合、参加者は日本人ばかり、18人、飛び入りが1人加わりました。案内は日本人女性。大型バスに乗り込み、高速道を約2時間移動、その間、なだらかに起伏する樹林や草原を見て、最初の停車地は、バーフォード、三角屋根で灰色の壁、あまり高くない家が連なる村です。片隅の骨董店に入るとブルーウィローの使い古した皿を見つけ、5ポンドで買いました。安いです。1ポンドは約150円。出発して、次に停まったのがバイブリー、小川が流れ、湿地を囲んだ遊歩道があり、周りに典型的な、低い灰色の三角屋根の家が並んでいます。写真に最適でした。3番目の停車地、ポートン・オンザ・ウォーターで昼食。ここは村というより、観光客の群がる街です。4番目はストー・オンザ・ワールド。ここも賑やかな街といった所。もう1枚ブルーウィローの使い古した皿を見つけました。12ポンドで買いました。帰路に就き、午後6時半、ビクトリア駅近くに戻りました。コッツウォルズとはこんな所かという好印象が強く残りました。

ロンドン最終日の6月12日、コートールド美術館で印象派の絵を多数、楽しんだ後、ハイドパーク角のアプスリムハウスという館を見に行きましたが、残念、月、火曜は休館、チェックを抜かしていました。ここでは、ベラスケスの「セビーリャの水売り」を見る積もりでした。これも日本のTV番組で詳しく解説していたものです。

だんだん、疲れが貯まり、アプスリムハウスの代わりにどこかへ行こうという気力がなくなり、スーパーで山羊のチーズを買って、早々とホテルに引き上げました。旅の終わりです。